

米医 D・B・シモンズについて

荒井保男

D・B・シモンズ Duane B. Simmons は最初の米国和蘭改革派教会派遣宣教師として、安政六年十一月一日、神奈川に到着、近くの宗興寺に住んだが、翌、万延元年（一八六〇）秋には、夫人が極端なユニテリアンであったことから、ミッションを辞職し、完全なる医師としての道を選び、居留民の医師として開業した。

その後、翻然、欧州に渡り、英独仏の「大家碩学ト其術ヲ討論研究シ」、再来日した。

帰国後、G・F・フルベッキ Verbeck, Guido Fridolin の推薦により、明治三年三月、大学東校に奉職し、約一年間勤務した。

辞任後、明治四年春、横浜の元弁天通りに建設された仮病院に週一回の割合で勤務した。

この頃、即ち明治五年一月、シモンズは神奈川県令あてに、「防恙法建立執行之儀」の建言書を提出。これが採用され、神奈川権令大江卓が立案し指導して制定されたのが、明治六年の「家作建方条目」である。更に同年五月、同県令あてに「売薬取締まりの建言書」を提出。この意見も影響して明治六年十一月、東京医学校内に製薬学校が併設されたといわれる。

さて、前述の仮病院が不幸にして焼失すると権令大江卓は病院の必要性を説き、再建を勧説し、明治五年九月、市中

共立病院を設立。これが明治七年十全医院と改称されるが、「官特ニ之ヲ保護セザレバ益々盛大ニ運歩スル能ハズ」として、明治六年六月よりシモンズは神奈川県雇医に任命された。月給三百二十円。

以後、十全医院の全権を与えられ、十全医院の看板医者として活躍、名医の名をほしのままにした。なかでも、①人体解剖と脚気死亡患者の病理解剖、②明治十年、十一年と続くコレラ大流行の際の治療と予防、③県下全般への種痘の励行と実施（種痘済の者に種痘証明書交付）などは高く評価されるべき業績である。梅毒の治療にもすぐれ、『徹毒小箒』の著書がある。当時もてはやされた駆虫剤セメンエンは、巷間ではシモンズの創始にかかるとされていた。シモンズ直伝とされる薬用石鹼もある。

シモンズと福沢諭吉との交遊もまた特筆されるべきで、明治三年、シモンズ三十六歳。この年福沢は発疹チフスに罹患、文字通り生死の間をさまよったが、この時、シモンズが福沢の一命を救ったことから、福沢の信任を得、肝胆相照らす仲となった。

明治六年、福沢が義塾構内に慶応医学所を設立すると、臨床講義をうけもつ一員となり、以後、松山棟庵らと行動を共にし、成医会にもかわりを持ち、英米医学の担い手として活躍したが、明治十三年三月、十全医院を辞し、故国アメリカに帰った。

帰国後はニューヨーク州ポーキプシーに住み、この地にあつて、留学して来た福沢諭吉の息子、一太郎、捨次郎の後見役となり、とくに一太郎のコーネル大学の入学に尽力したり、海外視察のためニューヨークに滞在中の浜口悟陵に多大の便宜をあたえたりした。慶応義塾「大学部」の設置に貢献したアーサー・ナップ Arthur Knapp の来日（明治二十一年）にもかかわりをもったかと思われる。

シモンズは、かねてからの希望が叶い、明治十九年十二月再び来日、以後、福沢の知遇を得て、三田山上に居を構え、すべてが欧化され、日本固有の醇風美俗が失われて行くのを歎き、日本主義陣営の闘士として、時事新報に論説をほり健筆をふるったが、不幸病を得て、明治二十二年二月十九日、死亡した。時に五十歳、死因は腎炎であった。